

ジャージー視察交流会 大雪で視察は断念

統計開始以来の初積雪

日本ジャージー登録協会(東山佑介会長)は去る11月24日、25日の両日、全国ジャージー酪農振興協議会(真田善弘委員長)並びに公益財団法人神津牧場(須山哲男場長)の協賛の下、長野県佐久市の佐久平プラザ21会議室において、ジャージー視察交流会を開催し、4年ぶりに全国から集まったジャージー酪農家と関係者でのジャージー生産地の現況報告を行うとともに関係者の交流を図った。

当初の予定では「ジャージー視察交流会 in 群馬・神津牧場」として、初日は群馬県下仁田町の神津牧場を会場に視察とジャージー生産地からの現況報告を行い、JR佐久平駅隣接のホテルで交流会を実施、翌日は駅から約1時間半に位置する長野県南佐久郡南牧村のジャージー酪農家を視察することでスケジュールを立て、参加者を募集した結果、事務局も含め26名の参加をみた。



ところが、11月としては都心では54年振りの初雪となったほか、明治8年の統計開始以降初めての積雪を観測するなど、関東地方は大荒れの気象となり、各種の公共交通機関に乱れが生じた。九州方面からの飛行機もかなり遅れたため佐久平駅からのチャーターバス出発を1時間遅らせ、神津牧場に向かったものの、長野県と群馬県を結ぶ主要国道も圧雪状態で、そのうえ、神津牧場の手前5.5キロのところからでは除雪の建設業者から牧場に向かうのは無理といわれ、各方面と連絡協議した結果、敢えて危険を冒してまで現地に向かうのはどうかということになり、神津牧場視察は断念せざるをえなかった。

そこで、バスを宿泊ホテルの佐久平プラザ21に引き返すとともに、会議場を確保し、生産地の現状報告を行うとともに交流会を実施した。

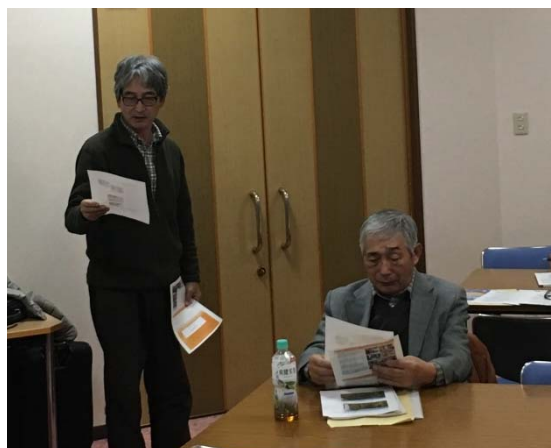
【なお、翌日の長野県の酪農家視察にあってもバスのトラブルで出発できず、やむなく断念。一部の人間だけでお詫びを兼ねて訪問したので、その概要と写真を別途掲載しました。(事務局。)]

会議の冒頭、東山会長からは、「昨年10月の北海道全共でも大変な天気であった。大雪と暴風に見舞われ、出品者・関係者には大変な思いをされてお帰りになった。今年は4月の熊本・大分大地震に始まり、岩手県岩泉町と北海道清水町で台風を端に発した大水害など、例年にない異常気象が続いている。

この交流会は概ね2年に一度、各地のジャージー生産地を会場に開催してきた。4年前には岡山県蒜山でジャージーフォーラムを、昨年は北海道全共の出品者と関係者を対象にカナダのブライドン牧場主を招いて交流会を行ったが、今回は群馬の山間地で放牧を主体にジャージー酪農を営まれてきた神津牧場を会場に交流会を計画した。生憎の天候で牧場には行けなかったが、全国のジャージー関係者が集まっているので交流を深めてほしい」との挨拶が行われた。

山岳地帯で放牧酪農

続いて、当初の視察予定地であった神津牧場の須山哲男場長から概況報告が行われた。なかでも、場内の敷地は標高850^mから1350^mの山岳地帯に位置するため、トラクターが入れるところは採草地として使うが、それ以外の傾斜地はすべて放牧地として使っており、それ故、「神津放牧しぼり牛乳」というネーミングでパック牛乳を販売できることも長所と述べていた。また、多くの種類の乳製品の製造並びに雄子牛の肥育にも取り組み、場内のみならず関東各地で販売を行っていることを披露した。



配付資料によると、長野県の豪族である神津邦太郎が指揮を執り、明治20年(1887年)に牧場を開設し、明治22年にはバター製造を開始した。沿革によると理想を追いすぎて経営困難となり、大正10年には銀行家に経営を譲渡、昭和10年には明治製菓に経営を譲渡、昭和20年に生糸の相場で巨万の富を得た石橋治八郎氏の篤志寄付により財団法人神津牧場が設立され明治製菓から牧場を買収した。現在の面積は387haで、そのうち100haが草地である。ジャージー雌牛とそれから生まれた子牛のみで約200頭、多いときは240頭にもなる。事業内容は放牧酪農と乳製品の製造・加工。「草と牛は一体であり、草を乳に換える」という創業者の信念のもと、試行錯誤を重ねながら独自の放牧酪農を確立するとともに、明治時代より高品質の乳製品を製造してきた。主な乳製品は①ソフトクリーム、②発酵バター、③チェダー、ゴーダなどのナチュラルチーズ、④のむヨーグルト、⑤牛乳、⑥アイスクリームなど。場内ほか、道の駅(下仁田、藤岡)や土産店・スーパー(軽井沢)などで販売されている。また、雄子牛もそのまま淘汰するのではなく、一定期間飼育して、場内で鉄板焼きとして提供するだけでなく、「料理王国(2014/1)-大特集・プロが使う“旨い牛肉”」として紹介されているように、東京都内の高級フレンチや高級イタリアンで食材として使われているようだ。

急激な近交上昇を避けよう

続いて、日本ホルスタイン登録協会登録部の岡係長から、「ジャージー種における近交係数の上昇と遺伝病」をテーマに話題提供が行われた。この件はフォーラム等がある度に継続的に公表して、警鐘を鳴らしている内容ではあるが、わが国のジャージー種集団では近交係数の平均が2010年に6%を超え、近年は横ばいだが、この数字はカナダと同程度。2011年から2015年に生まれたジャージー種の

近交係数分布を調べると、全体の37%が6.25%以上となっている。近交が高まると遺伝病を発現しやすくなり、場合によっては胎児の段階で死亡するなど、経営に大きなダメージを生ずることもある。

ジャージー種では、SNP検査の普及により近年判明したハプロタイプ型遺伝病のうち、JH1と呼ばれるものがあり、妊娠初期に死亡する致死遺伝病である。キャリアは「オブザーバー チョコレート ソルジャー」に端を発するといわれており、これは北米の主流となる血統に多大な影響を与えている種雄牛である。最近のアメリカの種雄牛では「インパルス リーガル」と「インパルス ルーイ」がキャリアと公表されている。JH1のキャリア増加を防ごうとしても、わが国では検査体制が整っていないため、調査は不可能。検査済みの国外種雄牛から間接的にキャリアである確率(キャリア頻度)を出して国内のジャージー集団を推定するほか手だてがない。この方法で日本の血統登録牛を調べるとJH1のキャリア頻度は2016年生まれでは17%、生存牛全体では8.41%となり、アメリカの12%に迫る勢いである。

要約として集団全体の近交係数が徐々に上昇するのは致し方ないが、個体の近交係数が急激に高まることは避けるべき。血統登録証明書の有効活用や家畜改良データバンクの近交回避情報を利用して交配種雄牛を選ぶなど、手だてを尽くしてほしいと締めくくった。

全国からジャージー関係者集合

今回の交流会には北海道からは日本ジャージー登録協会の東山佑介会長(三笠市)を始め、加藤賢一さん(帯広市)、石田守さん(剣淵町)、岩田政彦さん(北広島市)、松原秀雄さん(清水町)といった北海道ジャージー酪農振興協議会の役員が参加。秋田県からは土田雄一さん、土田浩治さん親子(にかほ市)、佐藤俊弥さん(由利本荘市)の3名。福島県からは相馬地区でジャージーを飼いアイスショップを営む片平雄作さんが参加。地元群馬県からは北軽井沢でジャージーと和牛を飼う竹淵さんと神津牧場の須山場長。福井県からは勝山市の松本忠司さん。山梨県キープ協会からは市村堅吉場長。岡山県からは蒜山の真田善弘委員長を始め小谷徹さん、長尾大志さん、小山清志さん、中村貢易さんの5名。香川県さぬき市からは矢木照男さん。熊本県小国地区からは高村祝次さん、桑名真也さん、渋谷淳さんの3名。株式会社野澤組大阪支店の只石大喜さん。事務局として大西と岡の2名がお手伝いした。



ジャージー生産地から現況報告もそれぞれ行ったが、このような情勢だからこそいろんな手だてを尽くして頑張っている様子が窺えた。また、最近ではSNSを通じて情報が得られるので、遠隔地だからといって手をこまねているのではなく、積極的に発信していくことが大切という発言があった。

なお、公式な了解は得られていないが、今回は是非とも九州で、という声で締めくくられた。

真冬は零下30度！

長野県南佐久郡南牧村・今井泰人牧場

残念ながら全員での視察ができなかったが、現地でJAの担当者が待っておられたことから、神津牧場の須山場長にお願いして現地視察を行った。同行者は福井県・松本さん、秋田県の土田雄一・浩治さん親子、佐藤俊弥さんと事務局2名の計7名。

ご当主は不在が事前に分かっていたので、JA南牧村畜産課の飯森家畜人工授精師に案内と説明をお願いした。経営概要はホルスタイン種が経産牛100頭と育成牛65頭、ジャージー種が経産牛70頭と育成牛35頭で合計270頭。年間出荷乳量を経産牛頭数で割るとホルスタイン種が1日1頭当たり28.6キロ、ジャージー種が同19.6キロ。交配種雄牛はホルスタイン種がLIAJの検定済みで近年はダース、シユークリン、スパイラル、アレンジなど。ジャージー種はABSで毎年1種類のみ。近年はプレミア、リーガ



ル、ヘッドライン、レキシントンなど。JAにお任せのため、彼の選択が3年後の経営を左右するという重責を担っている。

写真にあるように広々としたフリーストール牛舎の片側がジャージー、もう一方がホルスタインという飼育形態。ほ乳から育成の間は一緒に飼っている。堆肥処理は自分の耕作地以外は野菜農家へ。粗飼

料の多くが購入。ジャージー・ホルスタインともそれほど牛に無理をかけておらず、長持ちしている様子。酪農家にとっては小さな育成牛用の連動スタンションが珍しかった模様。

この地域は戦後の開拓団で入植したところであるが、冬は零下30度が当たり前。当日は晴れているにもかかわらず八ヶ岳からの吹き下ろしで風が冷たい。昨日の雪もほとんど溶けていなかった。道路の吹きだまりはアイスバーン状態。飯森さんの話では、昨日なら野辺山への坂道で数台のトレーラーが滑って道路を塞いでいた模様。



急 傾 斜 地 を 実 感 ！

群馬県甘楽郡下仁田町・神津牧場

さらに、福井県の松本さんが昭和の年代に神津牧場の従業員であったということから是非ともお伺いしたいということになり、神津牧場も視察を行った。前日登れなかった道路はやはりアイスバーン状態で除雪は行き届いていなかった。牧場の入り口とおぼしきところから牧場の全景がみてとれるが、写真でもわかるとおり約15センチの積雪。数日前までは放牧に出していたと説明をうけたが、南傾斜地のパドックを除き全面真っ白の世界であった。さらに、牧場内をくまなく見学させていただいたが、平坦部分は建物が建てられ、それ以外はパドックとして使われるか坂道かという状況で、本当に急傾斜地に立地していることが実感できた。現在、製酪工場を新設している途中で、来年春には完成という。



(文責：登録協会、大西)